

## キケロ「スキピオの夢」

## 水野庸記

## 解 説

時は紀元前一二九年の冬、執政官の布告に基いて、三、四日間祝われる習わしであった「ラテンの祝日」の、多分第一日目のことであった。共和制ローマの名門スキピオ家の時の当主、小スキピオ——詳しくはプーブリウス・コルネリウス・スキピオ・アエミリアヌス・アフリカヌス・ミノル Publius Cornelius Scipio Aemilianus Africanus Minor——の邸宅に、その親友ガイウス・ラエリウスをはじめとする八人が訪れる。(小スキピオとラエリウスとの親交の程については、キケロの小品「友情について」を読みたい。)そして、三日間にわたり一同は「国家について」の対話を続ける。(なお註⑧参照。)

これが、前五十四年に書かれ始め、五十一年には完成されていたと推定されるキケロの全六巻にわたる「国家論」(Ce Re Publica)の mise en scène となっている。キケロのこの国家論のモデルは、言うまでもなく、プラトンの「理想国」であった。そして、プラトンが「理想国」の末尾に、例の有名な「エールのミュートス」を置いた先例にならって、キケロも、ここに私が訳出した「スキピオの夢」を、自分の「国家論」第六巻の荘嚴な結びとして、これを対話の主要人物小スキピオの口から語らせたのであった。類似した問題を扱う手法が、プラトンとキケロとで異っている点に分析評価を試みるかとは、魅力ある課題ではあるが、紙面の制限によってこのたびは割愛しなければならぬ。

キケロの国家論を伝える古写本は、「スキピオの夢」の部分伝えるものと残余の部分伝えるものとが全く別である。後者の方の写本がようやく一八二〇年になって、しかもオリジナルの約三分の一程のみ発見されたにすぎぬのに反し、「スキピオの夢」は、A. D. 五世紀の初頭にこの夢の部分への註釈を書いた Macrobius が、その註釈に添えて全文を筆写してくれたお蔭で、湮滅を免れた。その結果、中世以来、「スキピオの夢」はキケロの独立した小品として広く愛読されて来たことが知られている。私に、この夢の部分のみではあるが、このたびその最初の日本語訳を企てた動機も、一つには右のような客観的な事情に促されたからであった。

翻訳にあたっては、原文のラティニズムの出来るだけ高次元における再現に最も意を注いだ積りである。原文が、その内容上の要求によってであろうが、格調の高い詩的散文となっているので、その点に留意することは特に重要かと思われた。つまり、一方では、不必要なパラフレーズを抑えることに努めつつ、他方では、キケロがはじめから日本語で書いたとしたらこう書いたであろうと判断されるような邦文を訳文の理想として念頭に置いた。逐語的な対応は、それが原文の独特な文体に資すると判断した箇所では、著しく重視した。しかし文単位または句単位での対応がそれ以上に重視されるべき場合には、必要な変更を加えての (*mutatis mutandis*)、原文との高次での合同を試みた。また *chiasmus*, *anaphora* などの修辞形式をはじめとする原文の配語法や、*alliteration*, *homoteleuton* などの聴覚上の効果に関するキケロの工夫のあとをも、出来るだけ再現しようと苦労したが、実現不可能に終わった箇所も少なくない。原文のペリオディックな文体が持つ美しさを伝えようと試みた処も多数ある。——なお、固有名詞の訳は、充分に日本語化しているものは現代の慣用に従った(たとえば河名 Nilus は「ナイル」)。然らざるものは、原語をそのまま音写した。

訳の底本には、事実上 M. Tulli Ciceronis *Somnium Scipionis*, für den Schulgebrauch erklärt von Carl Meißner (Teubner, 1915) を用う(この意味で、なお試訳の性格を有する)。一応の完成後、M. T. Cicero, *De Re Publica*, editit C. Ziegler (Teubner, 1929) と A. Th. Macrobi *Commentarii in Somnium Scipionis*, editit J. Willis (Teubner, 1963) とを照合した。註釈としては、右記 Meißner に *Index* の M. T. Cicero *Tusculanarum Disputationum Liber Primus et Somnium Scipionis*,

edited, with Introduction and Notes, by F. E. Rockwood (Ginn and Company, 1903) とを参考にしたが、私に独自の見解があつて、これらの註釈家の説に従わなかった場合もある。また *A Latin Dictionary*, by Lewis and Short (Oxford) や *Dictionnaire illustré latin-français*, par F. Gaffiot (Hachette) などとも、原文の読みや解釈を異にする箇所が少数ある。その他、試験的にやや大胆な訳を試みたところも若干あるので、諸家の御高評を賜りたい。なお、訳の完成後、Loeb Classical Library (No. 213) の C. W. Keyes による英訳を一読したが、あまり得るところがなかった。むしろ、この翻訳について貴重な御教示を折々賜った恩師田中美知太郎先生、畏友中村善也氏と長坂公一氏のお三方に、紙面をかりて深謝申し上げる次第である。

翻 訳

9 9 私<sup>①</sup>が執政官マーニウス・マニリウスの麾下に入る第四軍団所属の、御存じの通り軍事参議官としてアフリカに着いたとき、<sup>②</sup>何よりもまずさきにしたかつたのは、マシニッサ王を訪ねるということであつた。王は、当然の委細あつて、わが一家とは格別の友誼を結

んでいたのである。王は私の来着を見るや、私を抱擁し、老いの身を滝の涙で濡らしたのであつたが、ややあつて天空を仰ぎみて言うことには、「至尊の太陽よ、その他天界に住み給うもろもろの神々よ、有難きお蔭なるかな。私がこの世から去りゆく前に、わが王国で、しかもこの邸で、プーブリウス・コルネリウス・スキピオー殿に、そのお名前だけを思うてもわが胸は躍るあのお方に、まのあたりお目にかからせて頂くとは。それと申しますのも、昔お目にかかつたあの、類なく御立派な、誰よりも優るお方<sup>④</sup>の思い出が、私の胸から片時も消えたことのないためでございます。」それから私は王にその治下の王国のことを、王は私にわが国家のことを尋ねたりして、両方とも盛んに話が弾んだのであつたが、そのまにこの一日は暮れていったような次第であつた。

10 10

更にそのあと、王の催す如何にも盛大な宴席に臨んでから、私たち二人の話はつい深夜まで長引いた。席上、王は始終アフリカーヌスのことばかりを話題とし、高齢になおよく、昔のアフリカーヌスの事蹟をのみならず、その口にしたことまでも、ことごとく記憶していた。そのあと、一同それぞれ寢屋に引きあ

けるや、私は旅行による疲労があるところへ、この遅くまで夜更ししたためもあって、たちまち、日頃になく深い眠りに襲われた。丁度この眠りの中で、——それは、私見によれば、寝るまで私どもが口にしていた今の話題のせいに違いあるまいが、(人間が胸に抱いたり人と語り合ったりした事柄が、エンニウスの⑥作中に見えるホメーロスの場合と何か類似した様を、その睡眠中に作り出すということは、よくあるものだからである。つまり、エンニウスは覚醒時には常々、ホメーロスのことを始終思い、始終口にしていたのであった。)——アフリカーヌスが私の前に現われた。その顔かたちは、私が生前のこの人を直接見てというよりは、この人のかた取った像を見て知っていたものであった。それが祖父だとわかったとき、私の方は愕然と身も震えた。けれど祖父は言った。「落着きなさいスキピオー。恐がるのはやめて、私がこれから話してあげることを、忘れられることのないように、後世に伝え残すのだよ。」

11  
11

「お前、見えるかね、あの都市が。かつて私の手によりローマ国民への屈従をやむなくされておりながら、またもや前二回の戦争の続きをやり始め、おとな

12  
12

しくしていることは出来ぬあの都市が。」つまり祖父は空高くの、星々が一面に溢れ、光清らかに明々とした某所にあつて、下界のカルタゴの姿を見せてくれているところだったのである。「この都市の攻略を目的とするこのたびの出陣にあたり、お前の身分は、一介の兵卒たりと言うに近い。が、今より二千年のちお前は執政官となり、やがてこの都市を覆滅することとなる。その功によりお前は、今まではわたしから襲名していたにすぎないかの贈名を、わがみずからの力で取得した名として帯びていくこととなる。また、お前は、まず、カルタゴの討滅に続いて凱旋式をおこない、監察官となり、国使としてエジプト、シユリア、アジア、ギリシアの歴訪を果したるのち、立候補せずしてまたもや執政官に選出され、難渋極まる戦争の完遂、つまりヌマンティアの⑥殲滅をおこなうであろう。けれど、お前が凱旋の戦車を駆ってカピトリウムへ乗りこんで来てみると、思いがけもせぬことであらうが、わが国家は、私の孫が⑧なしたはかりごとによって動揺の姿を見せていることとなる。」

このときにあたり、アフリカーヌスよ、お前には祖国の前に精神の光を、お前の天分と英知との光を出し

て見せてやる務めがあらう。けれど、その折におけるお前のいわば運命の歩みは、私の見るところなお未定である。と申すのは、お前の齡のめぐりが太陽の黃道彎周ないし回帰を、七の八倍回数かたえおえて、そのいづれともそれぞれ別個の理由により完全数なりとされているこの二箇の数が、自然界の周行を手がかりに、宿命がお前に定め与えた完成を果し上げたとき、<sup>⑩</sup>お前ただ一人の上に、わけてもお前のほまれ高い名の上に、国の市民はこぞって期待の眼を寄せることであらう。お前を元老院は、お前を一切の廉直の士は、<sup>⑪</sup>お前をラティウムの盟邦らは見つめるであらう。お前こそ、ただ一身の肩に國家の安泰のかかる者となるであらう。否、更に、大事のみ申せば、お前は独裁官として國家統御のつとめを帯びることとなる。ただ、これは、お前が近親者どもの不埒なる手⑫を、もしうまく躲かわせたら、その上でのことなのだけだ。

——このとき、ラエリウスは激しい叫声をあげ、居並ぶ一座の立てた悲嘆の声も一寸並ならぬほどのものであったが、こうした一同へ穏かな微笑を向けながらスキピオーは言った。<sup>⑬</sup>「何卒お静かに。皆さんの声で私が眠りから醒めるといけませんのでね。そして今暫く、

あとの話を聞いて下さい。」——

### 13

「それはそうとして、アフリカーヌス、<sup>⑭</sup>お前がこれ聞いて國家守護の任務にそれだけ勇み励んでくれるようにと思って言うのだけれど、次のような確信を抱いてもらいたい。それは祖國を維持し、賛助し、その一層の發展に尽したことごとの者の行先として、天界のさる場所が確定しており、其処にあってこの人々は至福者として永生を享ける、ということなのである。まこと、およそ地上にてなされることでは、全世界を統べ給うかの長なる神により、何が嘉納されると申しても、人間どもの集合集聚の、正義に基いて固め結ばれ、世に國家と称せられているものに若くはない。これら國家の統治者ならびに守護者たちは、此処より旅立ってまた此処へ帰るのである。」

### 14

このとき私は、死を恐れてというよりはむしろ、不意討がわが一族の側からなされるということの方を恐れて、痛くおびえを覚えていたのではあったが、かく言う当の祖父も、父パウルスも、<sup>⑮</sup>その他既に故人であると皆は思っている方々も、生きておいでなのでしょうかと尋ねたのであった。「とんでもないことを、故人だなどと。」と祖父は言った。「生きているとも、

此処の人々は。肉体という足枷は恰も牢獄の如きもの、その中からはもう羽撃いて出て来た人達なのだから。それに反し、お前らのいわゆる生とは実は死のことなのである。ほーら、お前見たらどうだ。お父さんのパウルスがお前の方へやって来ているじゃないか。」父の姿が目にはいるや、私の方は涙があとからあとからと押え難く流れ出た。しかし父は私を抱擁し、それに口づけもしながら、泣くなど頻りに言い続けたのであった。

15  
15

そこで私は、涙を抑えてやっと物が言えるようになりかけるが早いか言った。「気高くして誉高きことこの上なき父上様、何卒聞こし召されますように。此処のこそが生命いのちでありますこと、ただいまも祖父アフリカヌスが仰せられるのを伺った通りでございますからには、何で私は地上を立ち去り難き処と致しましう。さあさあ、父上がたのおわすこの地へ急ぎ参らばなりますまい。」「然にあらざ」と父は言った。「思うてもみよ、今お前の眼に見えている限りの此処全体をその聖域とし給う程のいと高き神が、肉体というあの憐むべき牢獄からお前を解き放ち給うた上でなければ、此処へ来ることがお前の意のままになるわけはな

16  
16

いのだから。まこと、人間どもの、出生にあたって負わされたる使命とはまさにこのこと、つまりあの通りこの天空の中央にあって、世に大地と称されるかの球体の上に、銚はちいの眼を注ぐということ。それに、人間どもへ賦与ふじゅされたる精神も、かの常とこしえの火——汝等の呼名では恒星並びに惑星——の手より来たれるもの。しかもこれらの星々は、その実、球状円形、神より来たる知性もてその生命いのちと致し、その周路軌道の一巡を驚くべき速度でなすものである。この故を以て、すべて敬いの心厚き者どもと同じく、プーブリウスよ、お前もまた、精神をば肉体という牢獄の中へ留め置かねばならず、精神の汝らへの賦与者たるお方の命なくては、人の世より去りゆくことはならぬのである。それは、神により定められたる人の務めを、汝らの忌避したと見られることがないためである。

そのことは措き、よいかスキピオー、この通り、ここにおわすお前の祖父の通り、お前の生みの父たる私の通り、正義と義務を尊ぶ心とを培うのだよ。この心が両親のこと一族のことにかかわる折に重要であるのはまず勿論のこと。そのわけても重要となるのは祖国のことにかかわる折において極まる。かく生きゆくが

天界へと辿りゆく道、既に地上の生を終え、肉より放たれて今はあそこに見える場所に住む人達の、つどい集まれるこの塵市<sup>てんし</sup>へと辿りゆく道なるぞ。」父の指した処は、燃え立つ星々に囲まれ、眩<sup>くら</sup>しき限りの白熱の光を放っている輪形<sup>わがた</sup>の路<sup>みち</sup>であった。「なお、この場所は、地上での呼名で申せば、ギリシア人<sup>びと</sup>より教われるままに、乳色の輪<sup>わ</sup>と汝らの名づけたる処のこと。」其処に立つて万有を凝視すると、まず、ほかごとごとくも、格別に壮麗なる、また驚嘆すべき姿を私に見せてくれたのであった。——一度とてこの地上の場所からは見たこともないような星々があった。いづれを見ても、まさか世にあらうとは一度とて考え及んだことなき程の巨体が、其処にあった。これらのうち最小のは、天界から最も隔たり地上のすぐ手前にあって、余所<sup>よ</sup>よりの光によって光っている星<sup>ほし</sup>であった。また星々の球体は地球の大きさを軽く凌駕するものであった。

——それのみでない。いざわが地球はと見れば、その見える姿のあまりに小さくて、わが国の領土すらも、私どもは其処を足場に、地球上の点程のところに触れているのみといったさま、これには私も心の満たぬ情なさを覚えたほどであった。

17  
17

その地球に私が一層眼を凝らしていると、アフリカイヌスが言った。「のうこれ、お前は何時まで地上にばかり思いを寄せている積りかの？ お前の今来たれる処はいかなる聖域の連なるところか、見ればそれとわかる筈。聞いてくれよ、九つの輪、より正しくは九つの球、万物はこれにより縛り合わされているぞ。それらのうちの一つは天球、残る全部を包み囲んでいる外側<sup>そとがわ</sup>の極みなる球。あともろもろの球を囲いこみ固め保つものなれば、これこそほかならぬ至高の神。この中に嵌め込まれたるのが、かの回りゆく、星々のとわに変ることなき数々の道。この下に次々と続いて七つの球がある。それらは天空と反対に動いて後向きのめぐりをなす。これらのうちのまず一つの球にその座を占めるのが、地上の名によれば例のサートウルヌスの星<sup>ほし</sup>。次にあるのが、人類にその望みを容れて益するところ多く、ユピテルの星と呼ばれるかの光明るい星<sup>ほし</sup>。それから次が、赤色で、地上からの眼にはこわい星、汝らはこれをマルスの星と呼ぶ。ついでその下、まずは中程の一带を太陽が占める。太陽はほか一切の光放つものの群<sup>ぐん</sup>にとりその総司令、その首領、その光度の調節者、宇宙の霊にしてその程よき和ぎのみなも

18  
18

と、備わる力の強大なるは、おしなべて万物をわがみずからの輝きで輝きわたらせるほど。この太陽に従者の如く侍り随うは片やウェヌスの、片やメルクーリウスの進みゆく道。しまいに、最下の輪を月が太陽の放つ光に照らし出されてめぐりゆく。が、もはやその下には、死すべく、崩れ滅びゆくさだめのものしかない、その例に洩れるは、神々の恵みにより人類へ授けられたる知性のみ。つまり月より上が、もの皆不滅なる処なのである。それから、これは言うに及ばぬことながら、例の分、宇宙の中央にあって九番目のものなる地のたまは、動かずにいるばかりか下の極みをもなし、よってことごとく目方あるものは、みずからの落ち癖によりその上へとひた走りに急ぎゆく。」

こうした諸々の様に胆をつぶして見入っていたのが、われに帰るや否や私は言った。「おや？ これは。何の音ですか？ 私の耳一ぱいに聞こえているこんなに大きい、しかもこんなに美しい音は？」祖父は言った、「これぞかの古来名高き音なるぞ。これを内より割り分けている幾つもの隔ての間は、等しからずとはいえ、一定の比に従うきまり正しき差異を持つ。音の主はと言えば星々の輪、これらの押し寄りつつ動きゆ

くことによりこの音は作り出され、かくてここに、高きが低きと色々に混ぜ調えられて、おのずと作りなされるのが、その音色こそ様々なれど、いづれ劣らずみな和音なのである。まこと、これほどの動きの、あまた勢い激しく打ち進められて、音立たぬままにすむなどある筈もなく、またことわりの定めるところ、おのずと、端なる音の一方が高ければ、他方は低きものとなつて来る。かかる事の次第にて、恒星を載せゆく上の極なるかの天球の道は、他よりその回りの急激なれば、高くして勢い激しき音たてて動きゆき、逆に最も低きは、月の道にしてこなた下の極なる道の立てる音である。断るまでもなく、地球は九つめであるにはしても、いつも動くことなきものなれば、宇宙の中央にあたる処を占守して、常に一つの居所だけにかじりついているのである。それに反し、星々の進むかの八箇の道は、互を隔てる相間の別に応じて、それぞれに截然と異なる音を立てゆくが、いまの道のうちには、動きの力を同じくするものの二箇あるがため、音の種類は七つとなる。これは、およそ万物の絆たる数に当たる。——なお、天界の今見たさまこそ、学知深い人々は、これを絃器の演奏の上に写し表わし、以て此処の



場所へと帰りゆくすべを切り開いて、みずからの手に得たのであるが、かかる人々の類にはまた、様々と抜群の才能をそなえ、その生きゆくは人の身ながら、神となることの研究にひたすら耽った人達も入るのである。――

19 さて今の響きが人間どもの耳にうち溢れたる揚句、その聴く力は失われた。そもそも汝らにあっては、感覚の力にしてこれより鈍弱なるはなく、その証拠にナイルの、名をカタドゥーバ<sup>⑤</sup>というあたりで、いと高い山々の間から逆向きに落ちくだる処では、其処の近くを居住の地とする人々は、その轟きの強いたため聴覚を欠くのである。ところが先程からの分は、これはもう大したもの、全宇宙の急激きわまる回りによる轟きであるため、人間どもの耳では聴こうにも到底手にあまる程。それはあたかも、太陽をまともに見つめることが汝らに能わず、その放つ光に、汝らの瞳の、定かに認め分けんとする力が、凌ぎ挫かれるさまに似る。」

20 こうした模様を嘆賞しながら、私はそれでもわが眼を地球へと、いくたびか返し向けたのであった。するとすぐアフリカヌスが言った。「わかっているぞ。お前がなお今に及んでも、人間どもの住いでも古里で

もある処に、気にかかることのありげな目差を注いでいることは。が、其処が、そのまことの様のまま、いまお前の目にも矮小なものに映ずるのなら、いまよりは、此処天界のものに変わらず敬いの眼を向けるべし、あそこ人の世のことを軽んずべし。早い話、お前ひとりの身の上のこととて、世の人の口にのぼる称揚の言葉にせよ、その立てるが願わしい誉れにせよ、わが手に入れ得るはいかなる類のものなりや？ あれに見える通り、地上で人の住むは、方々に散らばれる、おのおの狭少なる地域にして、これら人の住むあたかも斑点の如きところがまた、間をば広大なる人影なき荒地が隔て、加えて、地球を住処とする者どもは、まずその散々なるが、互いのあいだには一部の者の許より他の許へと何一つ漏れ広まる事柄のあり得ぬほど。それのみか中には、汝らの筋向いにあたって、中には横ざまに回った向う側に、中にはさらに汝らの真反対のところにもまでも、住みつきいる人達があるのである。この人達からわが誉れを認められんと願うこと、如何なる誉れをであれ、これは間違ひもなく汝らに出来ぬのである。

20  
21

また、此処からも見分けられる通り、件の地球は、

更に以上の様に合わせて、一々については今より説くが、あたかも冠をつけ身には帯を何条か締めたりといった装いである。かく見分けられるいくつかの地帯のうち、二つが位置相反対なることの最も著しく、ともども、丁度天の回りの軸上に安定して、その白雪で固められたるはあれに見える通り。逆に、あそこ中央にあつて最大なるは、太陽の炎熱に灼かれる。住まうに向いた地帯は二つある。うち、まずあの向うのは南側の分、その上を住いの地とする人々の、足裏を踏みつける向きは汝らと真反対、これは汝ら一群の者には何も関りない処。他方こちら側の地帯は北風の吹き寄せる処、汝らの住いのある処なれど、しかと見定めよ、此処が汝らにゆかりあるは、その如何ばかり些少なる区域にてか。まこと、汝らの暮しいる陸地全体は、両極への向きには狭小、幅やゝ広きは腹辺の相対う向きになれど、言うなればやはり小さき島にして、まわりを洗うが、あの、アトラースの海とも、巨いなる海とも、オーケアヌスとも汝ら地上では称しいる海。これが、名のみ彼程に仰々しけれど、その如何にも小さかるは、あれに見える通りなるぞ。

22 汝ら、暮しを営みいる土地、見聞の及びたる土地

は、これほどのみ。其処を出ては、お前の名にもせよ、はたまた、われら何人の名にもせよ、見て何処にあるかは分ろうが例えばこなたなるコーカサスをそれが越えゆくこと、或いはあなたなるガンジスを泳ぎ渡ること、左様なためしなどあったらうか。その他、日の昇る或いは沈む最果の地で、或いは北か南の地方で、これから誰がお前の名を聞くであらうか。これら諸々周辺の地を、こうして切除いてみよ。汝等の誉れが、みずからの広められんと欲するのは、何程の狭隘のうちに限られるか、必ずや分かる筈。のみならず、今われらのことを口にしつつある者さえ、その、今後口にし続けるは、何時までであらうか。

## 21 23

いや、それだけでない。来たらん世の遙かなる胤裔にして、みずから好み、われら一人一人の功をば、跡絶えなくその祖父の語を継ぎ、後世に伝え残すこと仮にありとしても、一定の時至ればその襲い来るがさだめなる、地の上一切に及ぶ洪水劫火のゆえに、われらの手にし得る誉れは、永遠なるはおろか、年数なきものですらないのである。また、お前のことが後の世の人々の語り種にならうとて、それが格別如何程のこととならうぞ。先の世にあった人々、それも、ただ

## 22

## 24

に遜色なきのみか、必ずや勝りし筈の人々、この人々の口からは、お前の話など出たわけもないことを思えど。わけても、われらの名を聞くことのあり得る者どもでさえ、その記憶の力が僅か一「年」間のことに及び得る者は、一人とてないことを思え。げに、世の人々は年を測るに、通俗には、もっぱら太陽の、すなわちまさしく一個だけの星辰の回帰を基準とする。が、まことのままに申せば、発進の同時に始められたる処と同じきへ、星辰ことごとくが打揃って回り歸り、かくてそれらが全天にわたる同じき模様をば、長い中間の時満ちて再び作り出したるとき、その時これこそが、真に一回りの年と名付けられることを得る。この一「年」のうちに含まれる人の世代の如何ばかり数多なるか、とても申せることでない。またかく申せばなお明らかとならう。その昔ロムルス<sup>⑩</sup>の靈、当然ながら此処なる聖域のうちへ入り来たつた折、もろびとの眼には太陽欠けてその光消えゆくかと思えたのであったが、いつのことにせよ太陽またもやそのときと同じ位置で同じ時日に欠けることあれば、そのときこそ、星座ことごとく、惑星もみな、原初に復るを以て、一「年」が時満ちて終りたりと案えるべきもの。しか

## 23

## 25

れど、よろしきや、爾来めぐり経りたる間は、この一「年」のなお二十分の一にも及ばざるぞ。

ゆえに聞く。此処の場所へ帰ることこそ、偉大にして拔群なる人々の、すべてを賭けて恃みとするところ。さらに、この望み、もしお前にはなしとすれば、人の世での誉れ、お前には頼りなりとて、それにそもそも何程の値打ちやある。その命脈、一「年」の僅かばかりの一切に及ぶすら、なかなか難きことなるに。

——さればなるぞ、高きに眼を向けること、わけても、此処滅びなき住いたり古里たる処を直向に見つめること、それがお前の今よりの望みとなれば、俗衆の評判にも心を託すな、おのが畢生の業にあたつて、世の人よりの報償にも期待を掛けるな。当然ながら、徳がおのずと、そのみずからに具わる誘いの力もてお前を引き寄せ、まことの名誉へと至らせる筈。が、余人がお前について立てる噂なるもの、その正体は如何、立ている当人ども、内心これを悟ることありとして、噂はやはり続けるであらう。それに、評判とは総じて、先にも申したるが、例の狭域の中に囲いこまれて、あれに見える一帯の地を出るはなし。のみならず、何人についての評判とても、年数に勝てるは古来

なし。いやまこと、その埋没するは人類壊滅のとき、後世の忘却によっても消滅する。」

24  
26

祖父が以上を言い終ると、私は言った。「いやあもう、わたくしは、アフリカーヌス様。祖国に功労あつた人々には、何か道のようなところを、天界の門へと至ることが許されておりますのなら、そうならばでございます、幼きより父とあなた様との足跡のままを進んで参りましたるにより、お二方の名譽を私は別に傷けたことなどはございませんけれど、只今かほどの報償あることをお示し下さいましたからには、今よりは、幾倍も怠りなく励みたきものでございます。」すると祖父、「そうだともお前、励んでもらわねば。そしてこう確信するのだ。死すべきはお前ではなく、この肉体なのだ。まこと、お前とは、お前のその輪郭がそれとわからせてくれるものなどである筈はなく、各人とは、あのほら、各人の心のこと。指でさし示され得るような形姿を言うのではない。それならば、よいかこれ、神なるぞお前は。神なりとは、いのち溢れいる者、見分け付ける者、記憶持つ者、予知する者、おのが手にその監督の責ある肉体をば、支配し制御し動かし、その業、まさしく、これなる宇宙に対するかの長

25  
27

なる神のそれに同じき者、かかる者のことを言う限りでは。しかも、死すべきものと言えるところある宇宙に対して、滅びなき神おんみずからがくくなし給うそのみ業通り、脆気なる肉体をば、いのち常なる魂が動かすのである。

これ、常に動くもの、不滅なるがためである。さるに、甲には力及ぼしてこれを動かせど、みずからは乙に強いられて動かされるもの、かかるものは動かされるをやめるとき、かならず、生きるをやめることとなる筈。ゆえに、おのれみずからを動かすもの、独りこれのみ、かたときもおのれから見放されるなどないことゆえに、かたときも、動くをやめることは、ないのである。いやそれだけでない。ほか一切の動くものにとり、このものこそ動きのみなもと、このものこそ動きの始めなるもの。ところが、始めなるものに生まれはない。それは、始めなるものからこそ一切は生まれ、このもの自身はほかの何物からも生じ得ぬからである。まこと、かりにも他から生まれるものならば、これは、始めなるものでないこととならう。——また生まれることのゆめなしとすれば、その滅ぶも、これゆめなきこと。それは、始めなるもの、もしかりに消

26  
28

滅すれば、みずからがまた他から生じること、おのれから他を生み出すことも、ないこととなろうから。——必ず、始めなるものからこそ、一切は生まれるべしとする限り。——してみると、動きの始めなるものと言え、それはみずからがみずからにより動かされるものを指すということになる。加えて、このものたるや、生まれるも能わず死するも能わず。さなくばかならず天界みな、万象みな、落ち崩れて静と止まるに至るのみか、その動くがための始めの弾みとなる力とても、およそそれに充行あてがわれるもののないこととなる筈である。

以上より、およそおのれみずからにより動かされるが如きもの、これこそが不滅なるは明かなれば、真底よりまさしくこのものなりとの性、もろびとの魂にそなわりいるを、誰か認めざる者やある。まこと、無生の物とは、すべて、外よりの押しに強いられて動かされるもの。それに反して、生あるものは、内よりの、よってみずからの動かしの呼声に應えて動き出す。それは、これこそが独り魂のみに具われるまことの性なり、その力たるがゆえ。しかもこの性さがこの力、その、おのれを動かすものたることにかけ、ほかには類なき

ものなれば、生まれたることも勿論なし。不滅にてもある。

## 29

いざやこれ、この力は、何にも勝れたる仕事に当りてこそ揮うがよけれ！ して、何にも勝れたるとは、祖国の隆盛を図る責務のこと、魂、もしこれに腐心し、よく詳審④なるに至れば、天翔り此処なる住いへ、おのが旅の果てなる古里へ着くが疾くならん。しかもその翔けるが足早なるを爾増すには因よすがあらん。<sup>⑤</sup>すなわち、魂、なお肉体にくのうちに幽閉されいる時より、囲いのそとへとからだ乗り出し、外側に在る筈のものに見いりつつ、能うが限り身を肉体より遠ざけることもしあればなり。まことにぞ、肉体の悦楽に溺れ、その下僕の如く振舞い、悦楽に盲従する欲望に駆られて、神人ともに従うべき法を犯したる者、かかる者どもの魂は、肉体より忍びいでしあとも、馴染深かりし地球のぐるりを足掻き回りて、此処の場所へは、責苦うち続く長き時期をば数重ねたる揚句、ようやくにしてぞ戻り着く。「

祖父の姿は消えた。私は眠りから醒めた。

## ① 註

小スキピオ。以下、12、12の終のところを除き、全体にわた

って話者乃至報告者は小スキピオとなっている。註⑭参照。

② 第三次ポエニ戦争の始まった、前一四九年。

③ 北アフリカ、ヌミディアの国の王。

④ いわゆる大スキピオ。 Publius Cornelius Scipio Africanus Major. 小スキピオはその養孫である。大スキピオは第二次ポエニ戦争でハンニバルをザーマの戦に破り、苦戦のローマを救った英雄であるが、その麾下のローマ軍と、マシニッサ王は同盟して、アフリカとともにカルタゴを敵として戦ったというわけがある。

⑤ 前三九——一六九年。ホメーロスを模倣して、ギリシア詩風の hexameter をはじめて採用し、叙事詩の形で前一七一年までのローマ史を歌った。よって、ラテン詩の父と仰がれる。

⑥ イベリア半島の都市。約十年間にわたりローマ軍を苦しめたあげく、前一三三年、小スキピオの率いるローマ軍の十五ヶ月間に及ぶ包囲攻撃を受けてようやく壊滅した。

⑦ ローマ市内にある七つの丘の一つ。上にユピテルの神殿がある。

⑧ Tiberius Sempronius Gracchus. いわゆるグラックス兄弟の兄の方である。その母 Cornelia は大スキピオの娘。ゆえに小スキピオもグラックス兄弟も、互には従兄弟、ともに大スキピオの孫にあたる。このティベリウス殺害(前三三年)の首謀者 P. Cornelius Scipio Nasica Serapio は、貴族派の側からみれば国家

の大功労者であるのに、その立像が公けの手で建てられなかったのを、ラエリウスがこの「国家について」の対話の席で嘲ったのであった。ラエリウスのこの不満の表明にこたえて小スキピオが二十年間他言しなかったものをはじめ物語ったのが、この「スキピオの夢」の話なのである。マクロビウスの前掲書 I, 4, 2 参照。小スキピオが五十六歳(7×8)となる時を指す。すなわち前一二九年のことである。

⑨ 原文の語は《boni》p' optimates という語と同じく、キケロ

では「貴族」の意であるが、キケロがこの語に籠めた価値感情を訳文の上に試みとして出してみたわけである。

⑩ 亡兄ティベリウス(註⑧参照)の遺志を継ぐ Gaius Sempronius Gracchus らに指導された平民勢力は、農民への国有地配分を実行しようとして、小スキピオを中心人物として戴く貴族勢力と激しく衝突した。この闘争の最中の或る朝、明けてみると小スキピオは寢床の上で死体となっていたのである。嫌疑は、当然、グラックス兄弟の姉妹にして小スキピオの妻であるセンプロニア(即ち大スキピオの孫)等に向けられた。

⑪ この一節は、夢の中の出来事を言うのでもなく、自分が見た夢の話をしている小スキピオの言葉の続きでもなく、前一二九年の「国家について」の対話の席の情景である。夢の場面が一瞬中断され、小スキピオを取巻く一座の対話の場面が覗いて来ている、といったこの作品の立体的な構成を、対話体尊重の精神がキケロにおいても躍動していることの一つの現われであるとして称讚したのは、R. Hirtzel (Der Dialog, I, Teil, S. 462) であつた。

⑫ 小スキピオを指す。大スキピオも小スキピオも、ともに、時にスキピオ、時にアフリカーヌスという名で示される。(小スキピオがブーブリウスと呼ばれている箇所もある) 二人のうちのどちらが指されているかは、一々註釈するには及ばぬであろう。

⑬ Lucius Aemilius Paullus Macedonicus. 小スキピオの実父。前一六八年、執政官としてマケドニア王ペルセウスをビュドナの地に破り、ためにローマは第三次マケドニア戦争に勝利をおさめた。

⑭ «a via via est in caelum et in hunc coelum...» に見られる「重」の alliteration を邦文の上に幾度でも再現してみようとする苦勞した。(「かく生きゆくが天界へと辿りゆく道」……ついで集まれるこの塵界へと辿りゆく道。coelum に当たる訳語が、caelum の訳語ら違ってしまったので、前者に注意を引くためにも稀語を当てた。

- ①6 銀河のこと。
- ①7 月を指す。
- ①8 ①9 ②0 ②1 ②2 この順に土星、木星、火星、金星、水星。
- ②3 Ziegler, Meibner, Rockwood, Merguet (*Lexikon zu den philosophischen Schriften Cicero's, s. v. disjungo*) に従って *disiunctus* と読む。
- ②4 金星と水星との道。17、17の中程を見よ。
- ②5 Herodotus II, 17 参照。
- ②6 現代風に言えば、ローマと同緯度上にあつて、赤道に関して対称の位置にある南半球上の地点を指す。
- ②7 ローマと同緯度上にあつて、ローマとの経度の差が一八〇度である北半球上の地点。
- ②8 地球の中心に関してローマと対称の位置にある南半球上の地点。
- ②9 前三世紀の数学者、天文学者のエラトステネスの説では、ヨーロッパ、アジア、アフリカより成る全陸地は、その東西方向が南北方向の約二倍の長さを持つ。
- ③0 大世界年 (*mundanus annus*)、中世天文学者らの呼称によれば「プラトンの説いた二年 (*Platonicus annus*)」を指す。プラトン

- 「ティマイオス」39d, 「理想国」第八巻 546bc を参照。この一年の長さは普通の太陽年で言えば三六〇〇〇年となるという説が有力である。マクロビウス前掲書 (2.11) では一五〇〇年とされている。
- ③1 伝承によるローマ初代の王ロムルス之死の年は、一応、前七二六年にあたる。
- ③2 原文 «ab eadem parte» の意味は Rockwood の註 «in the same part of the heavens» の繰り解すべきものと思われ。
- ③3 此処より26、28の終まで「プラトン」「ハイドロス」245c5-246a2の、キケロの手によるラテン訳が続いている。必ずしも直訳ではなく、Muret (*Var. Lect. VIII, 3*) の賞讃した通り、(Meibner, *ad loc.* 参照) キケロ訳に独特な技巧の跡がうかがわれる。
- ③4 原文の «agritus et exercitatus» に見える類似首語尾 (*homoioteleuton*) を(腐心……詳審)で表わしてみようと思つた。
- ③5 Meibner, Rockwood に従つて, «idque eo octus» と読む。
- ③6 «ipsam» の訳「馴染深かりし」は、軽く訳すなら「やはりその」位におおつてよいであらう。